

鸞綽二師の遺跡に詣して

常盤 大定

十月二十七日、交城縣に着するや、直ちに知縣

にあつて、來意を語り、石壁玄中寺の存不を尋ねた。若い知縣の袁氏は、故老に尋ねて、確かに存在すといひ、東道者の配慮を申入れたら、一巡警に馬背に予等が荷物を負はして、附けてくれた。

去つて、十支里の安定村に入るや、こゝから、兩山脈間の溪間を溯ることになるのであるが、巡警は其道を知らぬ。乃ち、村人を傭ひ來つて、四人して、山徑を次第に登つた。此間、風景のよいのは勿論であるが、時には、馬の荷物が右方の岩壁に觸れたのを、不注意な村人が、かまはず曳いたので、危く馬が二三十俵の溪底に顛倒しようといふ様な危険もあつた。午後六時頃、遂に通稱石壁

寺に達した。

石壁寺は全く石壁を切り平げて建てたもので、こんな無人の境とは思はれぬ程の大規模のものである。中心の大雄殿は焼けたまゝになつてゐるが、然し猶其上の高い所に千佛閣が高く聳へ、中段の左右に觀音堂があり、下段大雄殿の廢墟の左右に各三堂から成る方丈や客間があり、山門天王殿があり、鐘樓鼓樓があり、猶中庭に觀音と韋馱天とを背合せにした小堂があり、此外に猶三つの小堂があり、猶前側面に當り、溪を塞いで突兀と聳ゆる岩山の上に塼塔が立つてゐる。この塔は遙かに下の方から見えたので、登り登つて、これが見へた時は、うれしかつた。塔の立つて居る岩山を

半ば廻つて、石壁寺の七堂伽藍が忽ちに前面にあはれた時には、なつかしかつた。旅行を決定した甲斐のあることを喜ぶと同時に、二十七日夜を以て着し、二十八日の大半をこゝに送り得るの因縁淺からぬを味つた。

玄中寺は元の初に律を改めて、禪とした、劉公といふ人によつて、中興せられたのである。それ以來臨濟宗に屬し、今は唯一人の老僧が居て、三人の寺男を使用し、素より參詣者などは一人もないから、寺に屬してゐる田圃を耕させ、實に疏食とも何ともいひ様のないものによつて、僅かに生存してゐる。素より何事も知らぬ。巡警がまめめめしく働いてくれるので、兎も角晚餐を濟ませ、入野君と共に月下に立ち、燈香を供へて、小經を讀誦した時は、何とも云へぬ快感を覺えた。時に月蝕が初まり、既にして皆既となつた。睡眠せんとするや夢成らぬ。梟の聲が聞えた。深山の趣が

ある。

二十八日、沸曉千佛閣に詣した。澤山の鐵佛が悉く溫顔を以て、我を迎へたまふ。なつかしい事限りないが、まだ薄暗くて、よくは分らぬ前峰の塔に至らんとしたが、中間の馬背の如き峰に立てば、四面皆峭立して、目眩せんとする。石壁寺の名の起りはこゝにある。道が分らぬので、一旦下りて、前庭中の諸碑を點檢して後、鹽瀬を終へ、獨り大雄殿の廢墟に立ち、千佛閣を仰ぎ、拈香して、正信偈六首引の勤行をした。和讃は勿論鸞綽二師のである。朝飯を終へて、先づ塔に上り、巡警に機を操らせ、二人塔前に立ちて、照相せしめ千佛閣に詣してから、各々思ひ思ひの仕事を始めた。午後二時までの間に、出来る限りの努力を爲されねばならぬ。第一着は、閣の外面右壁に簞入せられてある小さな石盤に刻された唐代の石壁寺縁起拓である。これは寺中唯一の古い刻文であつ

て、中に明白に曇鸞大師創立の旨を記して居る。

更に閣内の夥多の鐵佛を點檢すれば、六七段三面の上に、布袋を中心として、約二百二十七軀がまします。之を歷視するに、其作が一時でない。

蓮臺のある稍小なるものは明代のもので、蓮臺のない鐵釋迦は稍大にして、相好が殊によい。相好のよいのは、約百二十七軀ましまし、唐代のもの少くとも、宋以上のものと拜まれる。勿體なけれど、靴のまゝにて壇上に登つて、塵埃の中に埋まれているのを（一々點檢すれば、百二十七軀中、前面の裳の上に寄附者の名が刻せられた小牌の残つてゐるのがある。詳に之を判讀する餘裕がないのが遺憾であつた。三四を讀み行けば、或は「三十七尊」といふあり。或は「第何尊」といふあり。同時に出來たものでないことを知らしむるが、然し大體上、同時代のものたるは疑がない。下りて下の少し平面の所に至り、七碑のあるのを見て行

けば中に、至元二十一年に立てられた宣慰謝公述修考妣功德記といふがあつて、中に古より傳へた百餘軀の鐵釋迦のあることを歌つてゐる。これある哉と心の中に叫んだ。猶下つて中庭に至れば、左右に粗末な樓欄を以て蓋うた二碑がある。左のものは有名な高氏書碑である。「志」によれば、開元二十六年に、僧普公鐵彌勒像を鑄るや、林謬がその頤を作つたのを、房隣の妻高氏が書したもので、書風羲之のまゝである所から、書家は香薻の大令なりとて、尤も之を寶としたといふ。然し現今のは、唐代の碑そのものではなく、金の晩年、泰和年間に再造せられたので、之を再造せるものは、劉公といふ僧で、本寺を再興して、元の太祖に歸依せられた人である。律が改められて、禪となつたのは、この人の時であらう。寺より溪を下ること三支里餘にして、溪を隔て、園中に林立せる五十餘基の塔中に、劉公のものがあつた。六角

の磚塔である。その形式が全く寺前に創立せる岩山上の六角大磚塔に同じい所から見れば、かの遠くより見らるゝ、大磚塔は元代のものである。之を綜合して考ふるに、無人の境とも云ふべき所にある本寺は、宋代に於て全く廢滅同様の運命になつたのを、金の晩年より、元の初期にかけて、劉公によりて、再興せられたのである。その後、明代に至りても、石潭といふ人によつて、天龍寺や童子寺と共に、また復興せられたことが、天龍寺の重修緣起の中にあつた。斯くて磚塔が元の形式

をとり、天王殿の四天王が明代の形式を取る所以が察せらるゝ。伽藍は斯くの如く元明時代に成つたものであるが、千佛閣内の約百二十七軀の鐵釋迦と、壁間の石刻緣起とは、唐代のものである。我々が二三人かゝつても、枉げ得られぬ程の唐代の鐵佛が、百二十七軀までも、立派に保存されて居るのは全く無人の境なるが爲である。うれしい

ことゝ思ふ。開元二十七年に、僧普公が鑄たといふ鐵彌勒といふのは、これではなからうか。然らば益々緣起が明白となり、宣慰謝公の記もそのまゝ生きた證據が眼前にあることゝなるのである。寺の鳥瞰圖を出せば、大體次の様なものである。

1 唐代刻本寺緣起

2 至元二十一年立宣慰謝公述考妣功德記

3 表蒙古文字、裏漢字碑（中に成吉思皇帝の文字あり）

4 康熙十五年立重修龍山石壁永寧禪寺佛殿碑記

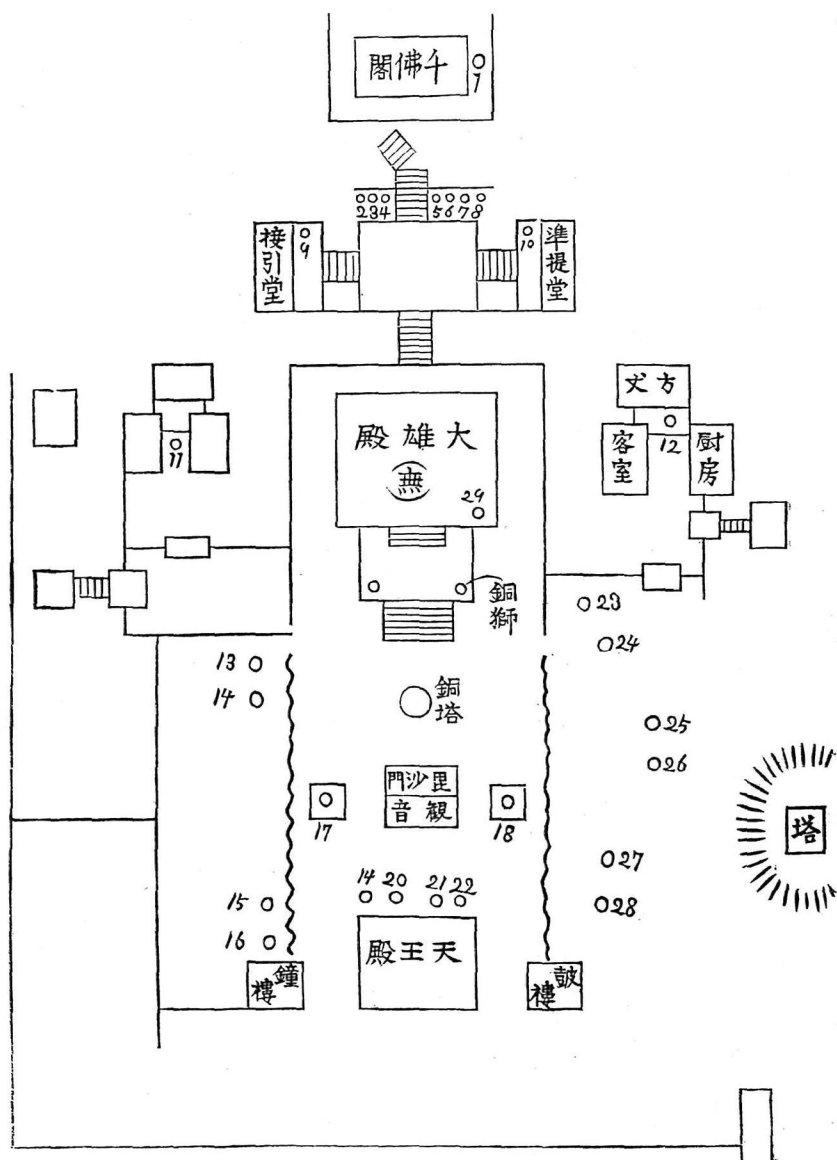
5 乾隆三十二年立重修石壁永寧禪寺碑記

6 中書省疏

7 乾隆四十七年立石壁寺剎建立佛殿東廊碑記

8 至元十五年立大龍山石壁寺圓明禪師遺行碑

9 10 11 12 清代立碑



13 明正統二年碑

14 清碑

15 元貞元年立宣授大原路僧錄安公行碑

16 元大往十一年立宣授上都路都僧錄寬公清行碑

碑

17 全泰和年間立高氏書碑

18 元至順二年立唐石壁禪寺甘露義壇碑

19 20 21 22 23 24 25 26 清碑

27 明成化五年立紀師功德之碑

28 29 清碑

悉くを、せめて年代と題號とのみにても、書き留めたいと願つたが、午後二時までの時間には、寸暇をも惜んで努力したに關らず、以上の取調べに維時足らぬ状況であつた。是等の中高氏碑は寺男に拓せしめた。是等の諸碑を一瞥するに、鸞綽二祖の風は元代に於て失はれた。否金代の末期に律寺といふ所から見れば、その前から失はれてゐた

のに相違ない。道綽禪師が、鸞師の碑前にて鸞師の行業に感激して、涅槃宗を捨て、淨土に歸せられたといふ有名な碑文などは、素より有るべき筈がない。予は「我は日本佛教徒で曇鸞大師の流れを汲むものである。本寺に曇鸞の名を傳へておるか」と尋ねたが、その名だも知らぬ。住僧は知らぬが、千佛閣の壁間の縁起は雄辯を以て、本寺の創立を鸞師であると語つてゐる。諸碑中、唯一つ心ゆくものは、第十六の寬公法行碑である。その裏面に寬公が鸞綽二祖の風を顯揚したことを賛してゐた。これを拓したかつたのであるが、到底その時間がなくて割愛することゝした。遺憾もあるけれど、半日の仕事としては、十分以上の努力をしたつもりである。

斯くて、振りかへり振りかへり、或は照相しつつ、前溪の石橋を渡り、次第に下れば、山の幽勝は愈幽勝をますばかりである。脚力猶餘裕がある

ので、溪の西方にある幾多の墓塔を、石溪を越へ
荊棘を分けて、一々點檢して、薄暮交城縣に入り
衛門に至りて、知縣に好意を謝し、西門より東門
に抜けて、晝食をせんだために、随分に疲勞し
た體を、早や城外とも云ふべき客舎に投じたかと
思へば、また出で、飯店に至り、巡警を加へて餐
を共にした。一日をこゝに待たした馬丁も報を聞

いて喜んで飛び來り、賑々しく食事を終へた。時
に夜は九時頃でもあつたらうか。石壁寺參拜は、
かくて終局をつげた。予は今回の巡禮行の甲斐あ
りしを喜ぶのである。

(本稿は常盤大定氏が、旅行先なる支那太原府より、南條文雄氏
宛に送られたる報告書の中から抜粹したものである。順識す)

俚諺に表はれたる錫蘭民族

山 邊 習 學

佛教が弘められる前の錫蘭は、妖鬼の棲む一孤
島に過ぎなかつた。併し西紀前二百年に摩哂陀の
殉教的の傳道で此民族は、長い闇夜の眠りから覺
めて靈の光りに觸れた。彼等は實の如く彼等を見
正に進まねばならぬ道を知つた。爾後二千數百年

の歴史は、佛陀の光りによつて、世界史の上に於
いても價值あるものとなつた。私はあの孤島にあ
つて、泌々と教といふものゝ尊いことを感じた。
そして出来る丈種々の方法で此民族を知らうと努
めた俚諺といふ管で見たのもその一つである。此